

## 61 馬王堆医書『養生方』の再検討

天野陽介<sup>1)</sup>・宮川浩也<sup>2)</sup>・花輪壽彦<sup>3)</sup>

## 一、はじめに

一九七三年に出土した馬王堆医書は、『馬王堆漢墓帛書—第四集—』（文物出版社、一九八五。以下『第四集』と略す）で全ての写真と釈文が公表された。これによって、整理復元の第一段階を終え、第二段階に突入したといえる。すでに中国では『第四集』に基づく研究書が五冊刊行されているから、今後は本書が底本になると考えられる。しかし、発表された写真版に対して、小曾戸洋は「復元修復作業はいささか不用意、杜撰に行われたと思えるふしがあり、不審な点がいくつもある」といい、『第四集』の写真版は再検討が必要であることを提出した（目でみる漢方史料館（一六〇）馬王堆漢墓医書—『五十二病方』『養生方』、『漢方の臨床』四八巻一〇号）。これによって、本書が底本として相応しいかとい

う疑問が発生した。筆者らは小曾戸の研究方法にならぬ、『養生方』の写真版について検討をこころみためたので報告する。

## 二、方法

馬王堆医書は、書写材料では絹帛と木竹簡に分けられる。絹帛の文献（帛書）について、小曾戸は、幾層かに折り畳んで埋葬されていたとすれば、折りたたまれた向かい合う頁は残存した形が似通い、しばしば文字が写り込んでいると主張する。この書誌形態学的な観点から、『養生方』について検討してみた。発表された写真は白黒で精度が粗いので、細部にわたる検討はできなかつたが、『第四集』の第六七頁にいくつかの図形的な特徴があったので、どこかに写り込んでいないかに焦点を絞って検討した。

## 三、結果

『第四集』第六七頁の帛は、中央で折り畳んであったらしく、縦に断裂している。これを中心にして左右の帛の形を比べてみると、あまり似ていない。さらに、左側の図形的特徴が右側に写り込んでいない。このことから

すると、第六七頁の左右の帛は向かい合ったものではなく、おそらく復元作業の誤りだと考えられる。そこで左側の帛と対称的な形をもち、同時に図形が写り込んでいる帛片を探すと、第六五頁の右側の帛がみつかった。両者を合わせてみると、第六七頁の左側の帛+細長い帛（真ん中の折れ線）細長い帛+第六五頁の右側の帛、という幅の広い帛であることが判明した。両方の細長い帛の一部は発見できなかったが、『養生方』には細切れの帛片が相当あり、おそらくその一部がここに該当するものと思われる。

#### 四、考察

第六七頁の復元写真は不適當で、その左側の帛は第六五頁の右側の帛と対になるべきものと考えられる。これにしたがえば、六七頁と六五頁の釈文が適當とはいえないくなり、同時に一部の目次設定も不適當になってしまふ。したがって、こんごは、全ての『養生方』の写真について再検討が必要だと思われる。復元しなおした写真と、それに基づいた釈文を作り直して、初めて底本として役に立つものと考えられる。そうしてこそ、初めて第

二段階の研究の足がかりになるのではないだろうか。ただし、白黒の不鮮明な写真では細部までの検討は為しがたいため、カラーの鮮明な写真が公開されることを強く希望するものである。

(東)<sup>1)</sup>海医療学園専門学校／北里研究所東洋医学総合研究所

(東)<sup>2)</sup>洋鍼灸専門学校／北里研究所東洋医学総合研究所

(北)<sup>3)</sup>里研究所東洋医学研究所